

# タントラ文献におけるnyasa儀礼の一例： Yoginihrdayaの第3章を中心として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード: 作成者: 井田, 克征, Ida, Katsuyuki メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00001038">https://doi.org/10.24517/00001038</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# タントラ文献における nyāsa 儀礼の一例

— *Yoginīhṛdaya* の第3章を中心として —

井田 克征

## 0. はじめに

ヒンドゥータントリズム儀礼体系の中に nyāsa と呼ばれる浄化儀礼が存在する。この儀礼は、複数の神格を示す特定の mantra を実践者の身体上に配置することによって実践者を浄化するものである。こうした象徴操作を通じた神秘主義的な儀礼は、タントリズムに特徴的に見出されるものとしてしばしば挙げられてはきたものの<sup>1</sup>、それに関する研究はいまだ始まったばかりである。その中でも Padoux [1980] は nyāsa 儀礼に関する最初の、そしておそらく最も重要な研究であろう。そこで Padoux は Śaiva および Śākta のテキストに見出される様々な nyāsa 儀礼を概観している。しかし彼の包括的な研究は、多様な変種を持つ nyāsa 儀礼の全体を見渡すものではあっても、その各 nyāsa の手順や構成要素の詳細にまでふれたものではなかった<sup>2</sup>。

本稿は nyāsa 儀礼の中でも sakta 派において極めて重要な位置を占めている、ṣoḍhānyāsa (六種の nyāsa) に関して考察するものである。この ṣoḍhānyāsa は Śrīkula 派の多くのテキストにおいて言及されていることから明らかなように、Śrīkula 派の儀礼体系の中でも極めて重要な位置を占めている<sup>3</sup>。それゆえ以下ではまず ṣoḍhānyāsa のプロセスをテキストに従って詳しく提示し、その後に簡単な考察を加えることとしたい。

nyāsa は、ni-√as から派生語として、「下・内部に (ni-)、置く・設置する (√as)」というような意味合いを持つ行為名詞であるとされる。しか

し儀礼の文脈において、この語にはもっと限定された意味が与えられることになる。これに関して Padoux は、Kane の次のような説明を引用している。「それは身体を清浄に、儀礼及び瞑想の器としてふさわしいものにするために神・神々・mantra・聖典に対して身体のある部位を占めるように心の中で勧請することを意味する<sup>4</sup>」。さらに Padoux は *Lalitāsahasranāma* 1.4 に対する Bhāskararāya の注釈を引用して「nyāsa と呼ばれるのは、それぞれの神格をそれぞれの身体の部分に配置することであり、その配置は瞑想を通じてなされる」とも述べている<sup>5</sup>。つまり nyāsa という行為は、神格を自己の身体に配置することを意味するのだが、それはあくまでも瞑想の中で達成される。そしてこの瞑想において、神格は mantra として操作される。

### 1. Ṣoḍhānyāsa とは

Ṣoḍhānyāsa はその名が示す通りに六種の nyāsa によって構成される一連の儀礼のプロセスに対して与えられた名前である。この六種の nyāsa はそれぞれ gaṇeśa・惑星 (graha)・星宿 (nakṣatra)・yoginī・十二宮 (rāśi)・聖地 (pīṭha) という要素を用いた nyāsa である。各 nyāsa において、これらの要素はみな神格化され<sup>6</sup>、種字 mantra すなわち字母神 (mātrkā) としての形態をとって身体の各部位に配置される。種字 mantra とは神格達をそれぞれに示す mantra であるが、それと同時に神格達の「種 (bija)」としてそれらの神格の源であり、またその神格そのものですらあるという。それゆえこの聖なる音節、種字 mantra を身体に配置することは、神格を身体に配置することに他ならない<sup>7</sup>。

本稿ではこの ṣoḍhānyāsa を考察するにあたって 11 世紀のテキスト *Yoginī-hṛdaya* (YH) を主に扱うものとする。このテキストはそれより僅か先立って成立した *Nityāṣoḍaśīkārṇava* (NA) と並んで、Śrīkula 派の根本聖典と目されているものであり、またその ṣoḍhānyāsa に関する記述は、おそらく最も初期のものの一つであると思われるからである。主に Tripurasundarī 女神に対する内的な儀礼 (antaryāga) を取り扱うものであるこのテキストは、

Śakta 派における神秘主義的な儀礼、瞑想体系を知る上で欠かせない文献である。

YH は、Cakrasaṃketa, Mantrasaṃketa, Pūjāsaṃketa と呼ばれる三つの章から構成される。この中で Cakra および Mantrasaṃketa は、実践者が究極的境地を達成するための瞑想と、それに用いる śrīcakra、mantra に関して詳しく述べている。それに対し Pūjāsaṃketa は瞑想の予備段階として行われる儀礼や、日常の儀礼などに関する記述を中心とする。そこで述べられる pūjā は、parā (最高)・papāparā (最高-非最高)・aparā (非最高) という三種の段階に分けられている。parāpūjā とは、外界とは既に関わりなくなった、瞑想の最終段階を示しており、この状態において sādḥaka (実践者) は最高原理との不二性を達成する。そして parāpūjā の前に行われる parāparāpūjā は、前述の śrīcakra を用いた瞑想である。そして最初の段階で行われる aparāpūjā は、外的な、それゆえに低位の儀礼であるが、これに関する記述は Pūjāsaṃketa の大半を占めるものである。この aparāpūjā の中で、儀礼を実践する行為者自身を浄化する手段として用いられるのが、nyāsa である<sup>8</sup>。この nyāsa にも幾つかの種類があり、実際 YH でも ṣoḍḥānyāsa の後に cakranyāsa などの nyāsa が述べられている。

既に述べたように ṣoḍḥānyāsa は 6 つの別々の nyāsa から構成されている。ganeśa, graha, nakṣatra などというそれぞれ数も内容も異なった 6 つの要素が、それぞれの nyaasa において神格として身体に配置される。しかしこれら 6 つの要素は、YH 以前に、元来は NA の冒頭にある Tripurasundarī 女神への帰敬偈において示されたものである。この偈は最高女神が持つに関する極めて重要なモチーフの一つとして、Śrīkula 派の多くのテキストで引用されている<sup>9</sup>。

この NA の帰敬偈は、次のようなものである。

ガナの主・惑星・星宿・ヨーギニー・十二宮という姿をした、[あらゆる] マントラという姿をした、字母 (mātrkā) であって、pīṭha

という姿を持った女神に、私は敬礼する (NA 1. 1)。

ここでは Tripurasundarī 女神がその現れとして gaṇeśa・nakṣatra などの姿を持つものとして説かれているが、これは本来 nyāsa 儀礼とは関係のないものであった。しかしここで述べられた最高女神の六つの様態の一つの原型として、その後 Śrikula 派の中で ṣoḍahānyāsa という概念が発展していくことになる。このことについて考える前に、まずこの ṣoḍahānyāsa の 6 つの各要素を詳しく見ていくことにしたい。

## 2. Ṣoḍahānyāsa における諸要素の対応関係

### 2. 1. Gaṇeśanyāsa

ṣoḍahānyāsa の中で最初に行われるのが、gaṇeśanyāsa である。この nyāsa では Tripurasundarī 女神を 51 の神格の群れ (gaṇa) の主人 (īśa) であると見做し、そしてその 51 の神格の群れを実践者の身体に配置する。これらの神格はそれぞれが gaṇeśa 神の異名とされる名を与えられており、そのそれぞれが妃を伴っている<sup>10</sup>。

その 51 組の神格は、それぞれが 51 の mātṛkā との対応関係を持っている。この mātṛkā とは、51 のアルファベットにそれぞれ anusvāra の付いたものとして表される種字 mantra のことであるが<sup>11</sup>、その mātṛkā と、神格との対応関係は、Bhāskararāya が「順番にしたがって、一つ一つの mātṛkā の音節を持つものとしてこの nyāsa を行うべし」(Yoginīhrdayasetubandha (YHSB) p. 197) と述べるように、51 の神格が初めから順次一対一対応し、例えば Vighneśa は am に、Vighnarāja は ām に、という具合に 51 の対応関係が成立する。

そしてこれら 51 の神格の姿は「昇ったばかりの太陽のような [赤い色の]、象の顔と三つの目を持った、鎖・鉤爪・施願印・不長印を手にした、śakti を伴ったもの」(YH 3. 20) として瞑想されるべきだという。

実践者がこうした神格を自己の身体に瞑想の中で配置する際、各神格を配

置しながら mantra を唱えるのであるが、それは例えば第一の Vighneśa の場合には *aṃ śrīyuktāya vighneśāya namaḥ* となるが (YHSB p. 197)、タントラ儀礼においてこのような「種字 mantra + 神格名 + namaḥ」という型の mantra は比較的よく見られるものであり、YH の *ṣoḍhānyāsa* の中でもほとんどがこのパターン of mantra を用いている<sup>12</sup>。

以上の対応関係をまとめたのが、次表である<sup>13</sup>。

mātrkā 神格	神妃	配置部位	pīṭha
aṃ Vighneśa	Śrī	頭	Kāmarūpa
āṃ Vighnarāja	Hrī	顔	Vārāṇasī
iṃ Vināyaka	Tuṣṭi	右目	Nepāla
īṃ Śivottama	Śānti	左目	Paunḍravardhana
uṃ Vighnakṛt	Puṣṭi	右耳	Purasthira
ūṃ Vighnahartā	Sarasvatī	左耳	Kānyakubja
ṛṃ Gaṇarāja	Ramā	右鼻孔	Pūrṇasaila
ṛīṃ Gaṇanāyaka	Medhā	左鼻孔	Arbuda
ḷṃ Ekadanta	Kāntī	右頬	Āmrātakeśvara
ḷīṃ Dvidanta	Kāminī	左頬	Ekāmra
eṃ Gajavaktra	Mohinī	上唇	Trisrotas
aiṃ Nirañjana	Balā	下唇	Kāmakotaka
oṃ Kapardavat	Tivrā	上歯列	Kailāśa
auṃ Dīrghamukha	Jvālīnī	下歯列	Bhṛguṇagara
aṃ <sup>14</sup> Śaṅkukarṇa	Nandā	頭の上部 <sup>15</sup>	Kedāra
aḥ Vṛśadhvaḥ	Surasā	口 <sup>16</sup>	Pūrṇacandraka
kaṃ Gaṇanātha	Kāmarūpiṇī	右腕の根元	Śrīpīṭha
khaṃ Gajendra	Ugrā	右肘	Oṅkārapīṭha
gaṃ Śūrpakarṇa	Jayinī	右手首	Jālandhra
ghaṃ Trilocana	Satyā	右手の指の根元	Mālava
ṇaṃ Lambodara	Vighneśānī	右手の指先	Utkala
caṃ Mahānāda	Surūpiṇī	左腕の根元	Kulānta
chaṃ Caturmūrti	Kāmadā	左肘	Devikoṭṭa
jaṃ Sadāśiva	Madaḥjihvā	左手首	Gokarṇa
jhaṃ Āmoda	Vikaṭā	左手の指の根元	Māruteśvara
ṇāṃ Durmukha	Ghūrṇitānanā	左手の指先	Aṭṭahāsa
ṭaṃ Sumukha	Bhūrti	右足の根元	Viraja
ṭhaṃ Pramodaka	Bhūmi	右足ひざ	Rājagrha
ḍaṃ Ekapāda	Satī	右足くるぶし	Mahāpatha
ḍhaṃ Dvijihva	Ramyā	右足の指の根元	Kolāpura
ṇaṃ Śūra	Mānuṣī	右足の指先	Elāpura
taṃ Vīra	Makaradhvajā	左足の根元	Kāleśa

thaṃ	Ṣaṅmukha	Vikarṇā	左足ひざ	Jayantikā
daṃ	Varada	Bhrukuṭī	左足くるぶし	Ujjayinī
dhaṃ	Vāmadeva	Lajjā	左足の指の根元	Vicitra
naṃ	Vakratuṅḍa	Dirghaghoṇā	左足の指先	Kṣīraka
paṃ	Dvituṅḍaka	Dhanurdharā	[右] あばら	Hastināpura
phaṃ	Senānī	Yāminī	左あばら	Oḍḍīśa
baṃ	Grāmaṇī	Rātrī	背中	Prayāga
bhaṃ	Matta	Candrakāntā	臍	Ṣaṣṭhī
maṃ	Vimatta	Śaśiprabhā	腹	Māyāpurī
yaṃ	Mattavāhana	Lokākṣī	胸	Jaleśa
raṃ	Jatin	Capalā	右腋窩	Malayaśaila
laṃ	Muṅḍin	Rddhi	左腋窩	Meru
vaṃ	Khaṅgin	Durbhagā	首の後ろ	Ḡirivara
śaṃ	Vareṇya	Subhagā	右腰	Mahendra
ṣaṃ	Vṛṣaketana	Śivā	左腰	Vāmana
saṃ	Bhakṣyapriya	Guhapriyā	両足	Hiraṇyapura
haṃ	Gaṇeśa	Durgā	二つの手のひら	Mahālakṣmīpura
ḷaṃ	Meghanāda	Kālī	腹の表面	Oḍyāna
kṣaṃ	Gaṇeśvara	Lalajjihvā	全ての肢体の関節 <sup>17</sup>	Chāyāchatra

図 1 : gaṇeśanyāsa および pīthanyāsa における対応関係

## 2. 2. Grahanyāsa

次の grahanyāsa では、実践者は 9 つの惑星 (navagraha) を身体に配置する。ある種の神格として理解されるこの 9 つの惑星に対して、ここでは 50 の mātṛkā が 9 つのグループに分けられてそれぞれ割り振られ、それが身体の 9 つの部位に配置される<sup>18</sup>。これらの惑星、mātṛkā、そしてそれらが配置される身体の対応関係は、YH では次のように述べられている。

母音と共に太陽を心臓の下に、ya に始まる 4 つの文字と共に月を bindu の場所 (bindusthāna) に配置すべし。ka に始まる行 (varga) の王である火星を 2 つの目に。おお、愛しき者よ。心臓に ca 行の王である金星を配置するべし。さらに心臓の上に ṭa 行の王である水星を配置すべし。ta 行の王である木星を喉の位置に。おお、愛しい者よ。臍に pa 行の主である土星を。おお、主宰女神よ。そして顔に śa に始まる 4 つの文字と共に Rāhu を、そしてまさに kṣa 文字と

共に Ketu を肛門に、配置するべし。おお、神々の主人よ (YH 3. 21-25)。

Bhāskararāya によれば、これらの神格を配置する際に唱えるべき mantra もまた先の gaṇeśanyāsa と同様のパターンにのっとり、例えば太陽ならば aṃ āṃ ... (以下種字 mantra が続く) sūryāya namaḥ などとなる (YHSB p. 200) <sup>19</sup>。

そしてこの graha を配置する時には、それらは次のような姿を持つものとして瞑想されるべきだと言われる。

美しき姿を持ち、天空を飾るものであり、望ましき姿を持つものであり、左手に腿を持ち、右手に施願印を持つ、赤・白・赤・紺・黄・黄白色・黒・灰色・暗赤色をした太陽をはじめとするものを瞑想すべし<sup>20</sup>。

以上の対応関係は、次の表のようにまとめられる。

mātrkā	graha	配置部位
aṃ āṃ iṃ īṃ uṃ ūṃ ṛṃ ṝṃ	太陽	心臓の下
ḷṃ ḻṃ eṃ aiṃ oṃ aiṃ aṃ aḥ	月	眉間
yaṃ raṃ laṃ vaṃ	火星	両目
kaṃ khaṃ gaṃ ghaṃ ṇaṃ	金星	心臓
caṃ chaṃ jaṃ jhaṃ ṅaṃ	水星	心臓の上
ṭaṃ ṭhaṃ ḍaṃ ḍhaṃ ṇaṃ	木星	のど
paṃ phaṃ baṃ bhaṃ maṃ	土星	臍
śaṃ ṣaṃ saṃ haṃ	Rāhu	顔
kṣaṃ	Ketu	肛門

図 2 : grahanyāsa における対応関係

### 2. 3. Nakṣatranāya

nakṣatra とは黄道に沿った月の通り道にあたる Aśvinīなどの 27 の星宿のことである。これらに対して、51 の mātrkā がこれまで同様に 27 に分けられ、対応付けられて身体の 27 部位に配置される。これが nakṣatranāya

である<sup>21</sup>。この時、各神格を配置しながら唱えられるべき mantra もまた、これまでと同様の型を持ち、am ām asvinyai namaḥ などとなる (YHSB p. 201)。そしてこの nakṣatra は、四本の腕を持つ神格として次のような姿で瞑想されるべきだという。

燃えさかる時の火のごとき施願印 (varadā) と不畏印 (abhaya) の手を持ち、礼拝の手を持ち、全ての飾りによって飾られたものが Aśvinī などである (YH 3. 28ab – 29cd)。

この 27 の nakṣatra の nyāsa は、次のような対応関係を持つ。

mātrkā	nakṣatra	配置部位
am ām	Aśvinī	額
iṃ	Bharaṇī	右目
īṃ uṃ ūṃ	Kṛttikā	左目
ṛṃ ṛīṃ ḷṃ Īṃ	Rohinī	右耳
eṃ	Mṛgaśīrsa	左耳
aiṃ	Ārdrā	右鼻孔
oṃ auṃ	Punarvasu	左鼻孔
kaṃ	Puṣya	のど
khaṃ gaṃ	Āśleṣā	右肩
ghaṃ ṇaṃ	Maghā	左肩
caṃ	Pūrvaphalgunī	右肘
chaṃ jaṃ	Uttalaphalgunī	左肘
jhaṃ ṇaṃ	Hasta	右手首
ṭaṃ ṭhaṃ	Citrā	左手首
ḍaṃ	Svāti	右乳
dhaṃ ṇaṃ	Viśākhā	左乳
taṃ thaṃ daṃ	Nnurādhā	へそ
dhaṃ	Jyeṣṭhā	右尻
naṃ paṃ phaṃ	Mūla	左尻
baṃ	Pūrvāṣāḍhā	右腿
bhaṃ	Uttarāṣāḍhā	左腿
maṃ	Śravaṇa	右ひざ
yaṃ raṃ	Śraviṣṭhā	左ひざ
laṃ	Śatabhiṣā	右すね
vaṃ śaṃ	Pūrvabhādrapadā	左すね
ṣaṃ saṃ haṃ	Uttarabhādrapadā	右足
ḷaṃ kṣaṃ aṃ aḥ	Revatī	左足

図 3 : nakṣatranāya における対応関係

## 2. 4. Yoginīnyāsa

ここで身体に配置される yoginī とは、Ḍālinī, Rākinī, Lākinī, Kākinī, Sākinī, Hākinī という 6 女神である<sup>22</sup>。それは YH において次のように述べられている。

viśuddhi・心臓・臍・svādhiṣṭhāna・mūlaka・ājñā に、根 (dhātu) の主人たる Ḍa に始まる神格達が配置されるべきである (YH 3. 30)。

上記のように、ここで身体の構成要素である皮膚・血・肉・脂肪・骨髄・精液の主人とも言われるこれらの yoginī は、実践者の身体の nāḍī に沿って存在する 6 つの cakra に配置される。そしてその際に各 cakra の中央に位置する yoginī 達を取り囲む花卉の位置に、さらにこれらの yoginī に従属する小神格達が配置される。6 つの cakra は、それぞれ異なった数の花卉を持つものとされるが、その各々の花卉と同数の小神格が、yoginī を取り巻くことになる。そして、これらの小神格は、自らがイニシャルとして持つところの各 mātṛkā に対応し、各 yoginī は自らが従える小神格達の mātṛkā を全て含む mātṛkā に対応している。例えば Ḍākinī は喉にある 16 弁の viśuddhicakra の中央に配置され、その種字 mantra は aṃ から始まって aḥ で終わる 16 の母音である。そして、この Ḍākinī を取り囲む viśuddhicakra の 16 弁に、16 の母音のそれぞれに対応した Amṛtā, Ākarṣiṇī, Indrāṇī, . . . Akṣarā という 16 の小神格が配置される。これらの神格のイニシャルがそれぞれ 16 母音となっており、種字 mantra と対応しているのである。このようにして Rākinī は 12、Lākinī は 10、Kākinī は 6、Sākinī は 4、Hākinī は 2 の花卉を持つ cakra に配置され、それらと同数の小神格に取り囲まれる<sup>23</sup>。

Bhāskararāya によれば、この nyāsa の際に唱える mantra は今までのものとは少し異なった形態を持つ。まず各 yoginī に対する mantra は、ḍāṃ ḍiṃ ḍamala vara yūṃ ḍākinyai namo hrīṃ śrīṃ aṃ āṃ māṃ rakṣa rakṣa tvagātmane namaḥ (Ḍākinī の例) などとなる。そしてさらに、これら yoginī を取り囲む小神格を配置する時にもそれぞれの mantra を唱えることになる

が、こちらは *aṃ amrtāyai namaḥ* という今までのパターン通りのものである (YHSB pp. 204–205)。

<i>mātrkā</i>	<i>yoginī</i>	配置部位	周囲の大神格
<i>aṃ āṃ . . . aḥ</i> (16)	<i>Ḍākinī</i>	<i>viśuddhicakra</i>	<i>Aṃṛtā</i> , etc.(16)
<i>kaṃ khaṃ . . . ṭaṃ</i> (12)	<i>Rākinī</i>	<i>hṛdayacakra</i>	<i>Kālarātrī</i> , etc.(12)
<i>ḍaṃ ḍhaṃ . . . phaṃ</i> (10)	<i>Lākinī</i>	<i>manipūrakacakra</i>	<i>Ḍāmarī</i> , etc.(10)
<i>baṃ bhaṃ . . . laṃ</i> (6)	<i>Kākinī</i>	<i>svādhiṣṭhānacakra</i>	<i>Bandhinī</i> , etc.(6)
<i>vaṃ śaṃ ṣaṃ saṃ</i> (4)	<i>Sākinī</i>	<i>mūlādhāracakra</i>	<i>Varadā</i> , etc.(4)
<i>haṃ kṣaṃ</i> (2)	<i>Hākinī</i>	<i>ājñācakra</i>	<i>Haṃsavatī</i> , etc.(2)

図 4 : *yoginīyāsa* における対応関係

## 2. 5. *Rāśinyāsa*

*rāśinyāsa* において配置されるのは、雄羊 (*Meṣa*)、雄牛 (*Vṛṣa*)、双子 (*Mithuna*)、カニ (*Karka*)、獅子 (*Siṃha*)、乙女 (*Kanyā*)、天秤 (*Tulā*)、サソリ (*Vṛścika*)、射手 (*Dhanus*)、マカラ (*Makara*)、水瓶 (*Kumbha*)、うお (*Mīna*) という十二宮 (*rāśi*) である。これが 12 のグループに分けられた *mātrkā* を種字として持ち、身体の 12 箇所配置される<sup>24</sup>。

この各 *rāśi* を配置する際の *mantra* は *aṃ āṃ iṃ ṛṃ meṣāya namaḥ* (*Meṣa* の例) である (YHSB p. 206)。

<i>mātrkā</i>	<i>rāśi</i>	配置部位
<i>aṃ āṃ iṃ ṛṃ</i>	<i>Meṣa</i>	右足
<i>uṃ ūṃ ṛṃ</i>	<i>Vṛṣa</i>	性器の右
<i>ṛṃ ṛṃ ṛṃ</i>	<i>Mithuna</i>	右腹
<i>eṃ aiṃ</i>	<i>Karka</i>	右胸
<i>oṃ auṃ</i>	<i>Siṃha</i>	右腕の根元
<i>aṃ aḥ śa śa sa ha</i>	<i>Kanyā</i>	右の頭
<i>kaṃ khaṃ gaṃ ghaṃ ṇaṃ</i>	<i>Tulā</i>	左の頭
<i>caṃ chaṃ jaṃ jhaṃ ṇaṃ</i>	<i>Vṛścika</i>	左腕の根元
<i>ṭaṃ ṭhaṃ ḍaṃ ḍhaṃ ṇaṃ</i>	<i>Dhanus</i>	心臓の左
<i>taṃ thaṃ daṃ dhaṃ ṇaṃ</i>	<i>Makara</i>	左腹
<i>paṃ phaṃ baṃ bhaṃ maṃ</i>	<i>Kumbha</i>	性器の左
<i>yaṃ raṃ laṃ vaṃ kṣaṃ</i>	<i>Mīna</i>	左足

図 5 : *rāśinyāsa* における対応関係

## 2. 6. Pīṭhānyāsa

最後の pīṭhānyāsa において身体に配置されるのは、Śrīkula 派で認められる 51 の霊場 (pīṭha) である。この 51 の pīṭha もまた、それと数において一致する 51 の mātṛkā と一対一で対応している<sup>25</sup>。そしてこれら 51 の pīṭha は、前から順に gaṇeśanyāsa と同様の mātṛkā、そして身体上の配置場所を持つ (この pīṭhānyāsa に関しては、先の表 1 を参照)。そしてこの 51 の pīṭha に対する mantra は、am kāmārūpāya namaḥ (kāmārūpa の例) などとなる (YHSB p. 208)。

## 3. NA 帰敬偈に対する諸注釈の解釈

ここまで見てきたような ṣoḍhānyāsa は、最初にも少し述べたように NA の冒頭で述べられる Tripurasundarī 女神への帰敬偈に基づいたものである。しかし NA の初期の注釈を見る限り、この帰敬偈を ṣoḍhānyāsa と関連付けるような解釈は示されていない。以下ではこの帰敬偈に対する NA の注釈を幾つか取り上げて、この両者の解釈の相違を見ていくことにしたい。中でも特に NA と YH との間の解釈の相違がはっきり現れているのは、gaṇeśa としての女神、そして yoginī としての女神の側面に関する記述である。graha、nakṣatra、rāśi に関しては、その数や構成要素に関しては既に一般的な見解がある程度定まっているからだろうか、それほど異なった解釈は見られない。

### 3. 1. Gaṇeśa

まず最高女神が gaṇeśa であるという帰敬偈の解釈であるが、既に述べたように ṣoḍhānyāsa の文脈では象頭の神 gaṇeśa の異名が 51 列挙されている。これに対し NA の注釈にはそれらの名前に対する言及は全く見当たらない。

Jayaratha による NA に対する最も古い注釈である *Vivarāṇa* (NAVi) では、帰敬偈中の gana という語を音素の 8 つの行として解釈しており、最高女神はそれら 8 行の主人 (Īśa) だという。音素の 8 行の主としての女神と

いう概念はそれ以降の NA 注釈にも引き継がれ、女神の現れとしての諸要素が 8 という数を持って、8 つの音のクラスに対応することがしばしば説かれている<sup>26</sup>。

[彼女は]、a, ka, ca, ṭa, ta, pa, ya, śa の群の主人 (gaṇeśa) であり、惑星の主人であり、nakṣatra および rāśi の主人であるところの yoginī の存在の源である (NAVi p. 2)。

しかし gaṇeśa に関する Jayaratha の見解は、彼の後に成立した注釈書 *Ṛjuvimarśinī* (NARV) 及び *Artharatnāvalī* (NAAR) の著者達には受け入れられていない<sup>27</sup>。その代わりに彼らは NA とほぼ同時期に成立したとされる *Prapañcasāraṇtra* (PS) に従いつつ、この gaṇa という語を Rudra の化身達として解釈している。

Gaṇeśa(pl.) とは、Śrīkaṇṭha に始まる 50 という数からなるものである。gaṇa とは、a 文字にはじまり kṣa 文字に終わる文字 (varṇa) である。その 50 の varṇa を本質とするものということである。あるいは、gaṇa とは、Indra をはじめとするものである。「Indra を第一とする marut の群れ」と聖典に述べられた 50 の marut の集団である。それもまた varṇa を本質とするものという意味である (NAAR pp. 5-6)。

これは先の Jayaratha の立場よりは YH に近い。つまりここでは gaṇa を音素の 8 行として理解する Jayaratha の解釈は放棄され、その代わりに 50 の神格の群れ (gaṇa) として理解しているといえるという点では YH によく似ている<sup>28</sup>。さらに PS はこの 51 の rudramūrti をそれぞれ種字 mantra と対応させており<sup>29</sup>、この神格による nyāsa に関しても言及している (PS 3.39-44, 52)。そこでは YH での gaṇeśanyāsa によく似た 51 の mātṛkā を用いた nyāsa が示されているが、ここで注意するべきであるのは、PS でのそのような記述にも関わらず、NA の注釈はこうした nyāsa について何も触

れていないという点である。これについては後にもう一度触れるが、この時点で NARV, NAAR の著者達は「gaṇeśa としての女神」を、「mātrkā の集合の主人」と理解する Jayaratha の解釈から、「mātrkā であるところの神格の群れの主人」と転換することで各 mātrkā の神格化、そしておそらくは gaṇeśanyāsa をも含む他の儀礼体系との理論の整合化を図ったのだと考えられよう。

### 3. 2. Yoginī

次に、yoginīに関する記述について見て行くことにしたい。NARV 及び NAAR によれば、yoginīとは Brāhmīをはじめとする 8 つの女神であるという。この 8 女神は、最高女神に従属するものとして śrīcakra の四方の門の周りに配置されたりする神格であり<sup>30</sup>、また YH では ṣoḍhānyāsa のあとに続いて行われる cakranyāsa の中で配置される神格でもある (YHDī. p.246)。このような 8 女神は、NA の帰敬偈に対する注釈において、それぞれ 8 つの音素の行 (varga) に対応するものとされている。NAAR は次のように述べている。

「yoginīの姿を持つ」とは次のようなことである。すなわち、a 行から生じるのが Brāhmīであり、ka 行からは Māheśvarīが、ca 行からは Kaumārīが、ṭa 行からは Vaiṣṇavīが、ta 行からは Vārāhīが、pa 行からは Aindrānīが、ya 行からは Cāmuṇḍā が、śa 行からは Mahālakṣmīが [それぞれ生ずるのである]。

このように mātrkā は yoginīからなるものである (NAAR pp. 7-8)。

このような女神と音素の 8 行との対応は、先に示したような Jayaratha による最高女神を音素の主 (gaṇeśa) とする読みと一致する。前節において見たように Vidyānanda および Śivānanda は Jayaratha の解釈を受け入れず、51 の各文字と神格との対応性を示したのだが、ここでは音素の各行 (varga) が神格と対応しているということが示されている。つまり 51 ないし 50 の

mātrkā は、それらの各々が小神格であると同時に、それらの各行もまた女神であり、さらに全ての mātrkā の総合であるのが最高女神、Tripurasundarī であるということになる。

mātrkā の主人としての女神という概念はこのようにして NA の帰敬偈において整備されたにしても、このような yoginī の解釈は ṣoḍhānyāsa の箇所と言われる Dākini などの 6 女神とは明らかに異なっている。

### 3. 3. Pīṭha

pīṭha の数や構成においても、NA の注釈と YH とでは違いがある。YH では先に述べたような 51 の pīṭha が認められるのに対して、NA の注釈家は 8 つを認めている。そしてこの 8 つの pīṭha は以上に示すように先程の 8 つの文字のクラスと対応している。

「pīṭha の姿を持つ」とは [次のような意味である。すなわち]、8 つの pīṭha、つまり、Kāmarūpa にはじまり Devikoṭṭa に終わる 8 つは、8 つの [音の] クラスから生じたものであって、女神がそれら [8 つの pīṭha] からなるという意味なのである。それら [8 つの pīṭha] は *Uttarasatka* において [次のように] 述べられる。

「東に Kāmarūpa、南に Kollagirya がある。西の方に Combhāra、北には Uṇaka(oḍyāṇa) がある。Malayaṃ が東南の方角に、そして Kulāntaka が南西に、Jālandhara が北西に、Devikoṭṭaka が北東にある」(NAAR p. 10)<sup>31</sup>。

### 4. まとめ

このように NA の帰敬偈に対する解釈は NA の初期の注釈文献と YH の 3 章とではずいぶん異なっている。NA の注釈文献の伝統では、この帰敬偈は常に最高女神と 8 行 51 音からなる mātrkā との相同性という文脈から解

釈されている。これは後のṣoḍhānyāsa をはじめとする様々な儀礼、瞑想の前提となる考え方ではあるが、YH の 3 章のように直接的に nyāsa の実践を示すようなものではない。この YH の成立は、おそらく現存する全ての NA の注釈に先行するにも関わらず<sup>32</sup>、NA の注釈家達は YH の解釈を全く無視しているように見える。これは一体どういうことなのか。

おそらく NA の成立した時点ではその帰敬偈はṣoḍhānyāsa を想定していた訳ではなかったのだろう。NA ではこの冒頭の偈以降にも女神に対する帰敬偈が続いていることを見れば、この冒頭の偈だけを取り上げて nyāsa 儀礼と関連付けるのは不自然である。それゆえ、Jayaratha を始めとする NA に対する注釈者達も、ことさらにこの偈を nyāsa に結びつける必要を感じなかったのだろう。ṣoḍhānyāsa は NA で述べられた帰敬偈に基づいて YH の成立した頃に体系化されたものであって<sup>33</sup>、本来の NA の帰敬偈の解釈には含まれていなかった。

ヒンドゥーの知的伝統の中では、このように伝統的な体系の中に新しい要素が加わる時にもほとんどの場合それは伝統の再解釈という形をとって現れる。新しいṣoḍhānyāsa という概念は、NA の帰敬偈の再解釈として成立し、その NA の権威によって自らを体系の中に位置付けようとする。これに対して、旧来の読みを保持する注釈文献の存在は、ṣoḍhānyāsa の概念とそれ以前の体系との間のいくつかの矛盾が解消される前の過渡的な状態を示しているのだろう。

現に、時代を下って NASB や NU などの新しいテキストを見るなら、そこでは NA の帰敬偈に対する解釈も、またṣoḍhānyāsa の体系自体の中にあつた細かい矛盾も解消されている。このようなṣoḍhānyāsa という概念の展開は、ヒンドゥー思想の伝統において常に繰り返されていく新しい概念の成立とその権威化のプロセスの典型的な例であると言えるだろう。

## 注

1. この儀礼には Goudriaan が幾つか挙げているタントリズムの特徴の中でも、タントリズムの持つ言語に対する神秘主義的な思索と、その実践的な展開である mantra 儀礼としての側面、そして瞑想によって生み出された超自然的かつ内的なイメージを現実化する側面などが見て取れる。Goudriaan [1979] pp. 7-9 参照。
2. この他にも mātrkānyāsa について簡単にまとめた Jani [1994] や、Goudriaan [1979] p.109 などがある。
3. Padoux [1980] pp. 73-74 参照。
4. Kane [1997] p. 1120 参照。
5. Padoux [1980] p. 60 参照。
6. というよりも神学的には最高の女神がこれら Gaṇeśa などの姿をとるのだと説明される。これは後に示す婦敬偈を見れば明らかである。
7. こうした種字 mantra の性格については Goudriaan, etc. [1979] pp. 101-105 に詳しい。
8. Gupta が示す nityāpūjā のプロセスの中で、nyāsa は内的儀礼に先立って行われる予備的儀礼の一つとして、prāṇāyama のあとに行われるものとされている。Goudriaan, etc. [1979] pp. 140-157 参照。
9. YH 3 章などの ṣoḍhānyāsa に関する記述以外においても、これら 6 つの要素に対する言及はしばしば見出される。例えば Śrīkula 派において最も重視される根本 mantra である śrīvidyā の解釈の中で、śrīvidyā はこの 6 つの要素と関連付けられる (YH 2.57-66)。そして、その他に偉大なる女神の多様な形態を称える詩句として、本来の NA での意味合いに比較的近い形で引用も見出される (TR 2. 88)。
10. 「その形態を述べる。—  
Vighneśa, Vighnarāja, Vināyaka, Śivottama, Vighnakṛt, Vighnahartā, Gaṇarāja, Gaṇanāyaka, Ekadanta, Dvidanta, Gajavakra, Nirañjana, Kapardavat, Dīrghamukha, Śaḡkukarṇa, Vṛṣadhvaḡa, Gaṇanātha, Gajendra, Śūrpakarṇa, Trilocana, Lambodara, Mahānāda, Caturmūrti, Sadāśiva, Āmoda, Durmukha, Sumukha, Pramodaka, Ekapāda, Dvijihva, Śūra, Vīra, Ṣaṇmukha, Varada, Vāmadeva, Vakratuṇḡa, Dvituṇḡaka, Senānī, Grāmaṇī, Matta, Vimatta, Mattavāhana, Jaṭin, Muṇḡin, Khaḡgin, Vareṇya, Vṛṣaketana, Bhakṣyapriya, Gaṇeṣa, Meghanāda, Gaṇeśvara (YH 3. 14-19)」  
「これらは Gaṇeśa と同数の 51 であり、順次、Śrī, Hrī, Tuṣṭi, Śānti, Puṣṭi,

Sarasvatī, Ramā, Medhā, Kāntī, Kāminī, Mohinī, Balā, Tivrā, Jvāl-inī, Nandā, Surasā, Kāmarūpiṇī, Ugrā, Jayinī, Satyā, Vighneśānī, Surūpiṇī, Kāmadā, Madajihvā, Vikaṭā, Ghūrṇitānanā, Bhūrti, Bhū-mi, Satī, Ramyā, Mānuṣī, Makaradhvajā, Vikarṇā, Bhrukuṭī, Lajjā, Dīrghaghoṇā, Dhanurdharā, Yāminī, Rātrī, Candrakāntā, Śasīpra-bhā, Lokākṣī, Capalā, Ṛddhi, Durbhagā, Subhagā, Śivā, Guhapriyā, Durgā, Kālī, Lalajjihvā というśaktiである。(YHDī, p. 233–234)」

11. ここでいわれる 51 のアルファベットとは、anusvāra (aṃ) と visarga (aḥ) を入れた 16 の母音、ka に始まる 25 の子音、ya, ra, la, va, śa, ṣa, sa, ha, kṣa, ḷa である。そしてこれら 51 の文字 (varṇa) に対して、それぞれ anusvāra を付加したものが種字 mantra である。これに関しては NA に対する Bhāskararāya の注釈、*Setubandha* (NASB) p. 10. 参照。
12. しかしこの mantra はあくまでも YHSB において述べられるものに過ぎず、実際に YH の成立時に用いられた mantra がこの通りであったとは限らない。*Nityotsava*(NU) や *Jñānadīpavimarśiṇī*(JDV) などのテキストを見ると、こうした mantra の最初に必ず aīm hrīm śrīm が付加されて、こちらの方が一般的であった可能性も高い。NU p. 19 参照。
13. nyāsa が行われるべき身体部の 51 の部位に関して、YH では全く述べられていない。それゆえ、それらの部位に関しては JDV の記述によって補った。厳密に言えば、これが YH で述べられている 51 神と完全に対応しているとは言いつけないのだが、概略をつかむ程度には役に立つだろう。  
 本稿では、YH およびその注釈である YHDīにおいて見出されない記述は原則的には Bhāskararāya の YHSB に基づいているが、そこにも述べられていなかったり、また Bhāskararāya の解釈が適切でないと思われる場合には、JDV および NU を参考にしている。  
 JDV は Vidyānanda によって 12–13 世紀前半に著されたものと考えられる。Brooks はこの Vidyānanda を NAAR の著者と同一視する Dvivedi の見解を疑問視し、もっと後代ではないかと述べているが、YHDīにおいて JDV が言及されている以上、13 世紀を下るとは考えがたい。NA intro., p. 21 および Brooks [1992] p. 52 参照。  
 一方 NU は Bhāskararāya の弟子である Umānanda によって記された新しいテキストである。以上の年代に関する議論は Goudriaan [1981] p. 151 ; Rastogi [1979] などを参照のこと。
14. これは a に anusvāra がついたものではなく、anusvāra の種字 mantra である。同様に次の aḥ もまた、visarga の種字マントラである。
15. NU によれば舌の先端。NU p. 99 参照。
16. NU によればのど。NU p. 99 参照。

17. *raṃ*以降の配置部位は、NUに従えば「右肩・首の後ろ・左肩・心臓から右手の指まで・心臓から左手の指まで・心臓から右足の指まで・心臓から左足の指まで・心臓から性器まで・心臓から頭まで」となる。NU pp. 100–101 参照。
18. YH はここでは *māṭṛkā* を先程の *gaṇeśanyāsa* の時のような 51 ではなく、*]*をのぞいた 50 として扱っている。このように NA および YH の中では、その文脈ごとにしばしば *māṭṛkā* の数などの食い違いが見出されるが、時代が下るに従ってそうした矛盾は修正されていく。この *māṭṛkā* の数に関して言えば、*Bhāskararāya* は常に 51 であるとしている。YHSB p. 200 参照。
19. また *Bhāskararāya* によれば、これら 9 つの *graha* に対してそれぞれに神妃を対応させる解釈も存在するという。それは *Reṇukā*, *Amṛtā*, *Dhātṛī*, *Śaṃkhiṇī*, *Śaṃkarī*, *Śakti*, *Kṛṣṇā*, *Dhūmrā* という 9 女神であるが (YHSB p. 200)、これらの女神を認める場合には唱えるべき *mantra* もまた少し異なったものとなる。現にこうした神妃を認めている NU の *mantra* は *aiṃ hrīṃ śrīṃ aṃ āṃ ...* (以下種字 *mantra*) ... *aḥ reṇukāyuktāya sūryāya namaḥ* (NU p. 101) となっており、冒頭の *aiṃ hrīṃ śrīṃ* と同時に、女神の名前が付加されている。JDV にも同様の *mantra* が見出される (JDV ga 本 p. 217)。なお *Bhāskararāya* も含む各著作家達は、この箇所の女神の名前においてそれぞれに食い違っており、これに関しては諸説が存在したようである。
20. この部分は、*Dvivedi* の校訂本には存在しない (YH Kaviraj 版 p. 198)。Padoux によればこの部分は多くのテキストにおいて欠落しており、後から挿入されたものと思われる。Padoux [1994] p. 278, n. 40 参照。
21. この *nakṣatranāya* における神格の配置場所は次のように述べられている。  
「それから、1) 額、2) 右目、そして 3) 左 [目]、4, 5) 両耳において、さらに、6, 7) 鼻の両穴、8) 喉、9, 10) 両肩において、それから、11, 12) 両肘、13, 14) 両手首、15, 16) 両乳、17) 臍の場所、18, 19) 両尻に、それから、20, 21) 両腿、同様に 22, 23) 両膝、24, 25) 両脛、そして 26, 27) 両足において」(YH 3. 26–29)。
- そしてこれらの箇所に配置される 27 の *nakṣatra* を示す種字 *mantra* は、Kaviraj の校訂本にのみある次のような記述によって知ることができる。  
「はじめの一対 (*a*, *ā*)、一つ (*i*)、それから三つ (*ī*, *u*, *ū*)、四つ (*ī*, *ī*, *ī*, *ī*)。一つ (*e*)、一つ (*ai*、二つ (*o*, *au*)、として 14 の母音が述べられた。子音において、一つ (*ka*)、一対 (*kha*, *ga*)、二つ (*gha*, *ṇa*)、一つ (*ca*)、一対 (*cha*, *ja*)、二つ (*jha*, *ṇa*)、二つ (*ṭa*, *ṭha*)、一つ (*ḍa*)、一対 (*ḍha*, *ṇa*)、二つ (*ta*, *tha*, *da*)。一つ (*dha*)、三つ (*na*, *pa*, *pha*)、一つ (*ba*)、一つ (*bha*)、一つ (*ma*)、二つ (*ya*, *ra*)、一つ (*la*)、二つ (*va*, *śa*)、三つ (*ṣa*, *sa*, *ha*)、それから *la*, *kṣa*, *aṃ*, *aḥ* という四つが配置される」(YH Kaviraj

版 p. 199)。

22. Śrīkula 派において yoginī という語は常に最高女神に従属する複数の女神達を示す時に用いられるが、文脈に応じてその語によって示される女神は異なっている。ある時には宇宙原理の動的側面である vimarsāśakti を構成する三要素、icchā, jñānā, kriyā を示している (YHDī 2. 17)、また後に述べるようにアルファベットの 8 行に対応する Brahmī などの 8 女神を示すこともある (NAAR pp. 7-8)。

23. YHDī は *Svacchandasaṃgraha* を引用して次のように述べている。

「第 1 の女神は Amṛtā、第 2 は Ākarṣiṇī 母神と考えられる。そして第 3 は Indrāṇi である。一方 Īsānī は第 4 のものである。第 5 は Umā 女神である。そしてまさに第 6 は Ūrdhvakeśinī である。第 7 は Ṛddhidā と呼ばれる。第 8 は Ṛṣā と考えられる。第 9 は Ḷkā と呼ばれる。Ḷṣā は第 10 である。第 11 は Ekapādā であり、第 12 は、おお Śiva よ、Aisvaryābhiraṭā である。それから Onkāri が第 13 である。第 14 は Auśadhātṃā である。第 15 は Ambikā である。一方第 16 は Akṣarā 女神である。これらが、喉にいる 16 の者達と言われる。

Kālarātri, Khātītā, Gāyatrī, さらに Ghaṇṭādhārī, Nārṇātṃā, Caṇḍā, Chāyā そして Jayā, Jhankārī, Jñānarūpā, Ṭāṅkahastā さらに Ṭhankārī というこれら 12 を 12 弁 [の cakra] において崇拝すべし。

そして Dāmarī, Dhāṅkāri, Nāminī, Tāmasī, Thāntā, Dākṣāyaṇī, Dhātrī, Nandā, Pārvatī, Phaṅkāri を、10 葉 [の cakra] において、東からはじめて北東に終わるように、崇拝すべし。

Bandhinī そして Bhadrakālī, Mahāmāyā, Yaśasminī, Raktā, そして Lamboṣṭhikā を [6 弁の cakra において] 順次供養すべきである。愛しき者よ。

そして 4 葉 [の cakra] において、おお主宰女神よ、Varadā, Śrī, Ṣaṅḍhā, そして Sarasvatī を順次供養すべし。おお吉祥なるものよ。

Kṣamā, Hamsavatī を、2 葉 [の cakra] において崇拝すべし。

これらの śakti 達と結びついた [Dākinī などの yoginī の] 瞑想が為されるべきである。おお、主宰女神よ (YHDī pp. 238-239)。

24. これらの rāśi と mātṛkā と配置場所の対応関係は、YHDī において出典の分からない次のような引用によって説明されている。

「牡羊は右の足に、最初の四つの音節 (a, ā, i, ī) と共に。牡牛は性器の右側に、u 文字にはじまる 3 つの文字 (u, ū, ṛ) と共に。ī 文字にはじまる 3 つの文字 (ī, ḷ, ḹ) と共に、双子は、右腹に。e と ai と結びついたカニの rāśi は、右胸に。o と au を伴った獅子は右の腕の根元に。am と aṅ と śa 行と共に、乙女は頭の右の部分に。ka 行を伴って天秤は左の頭に。サソリはその [左の]

腕の根元に ca 行と共に。ṭha 行と共に射手が心臓の左に。ta 行と結びついたマカラ (Makara) が左腹に。さらに pa 行と共に水瓶は性器 (linga) の左の部分に。ya 行と kṣa 文字に結びついた魚と呼ばれるものは左足に」(YHDi p. 240)。

25. これを 50 とするテキストも存在する。例えば JA 14.112-123 ; JDV p. 223 など。しかし Bhāskararāya はこれを 51 で統一し、NU もまたこれに従う。YHSB p. 208 ; NU pp. 107-109 参照。
26. 例えば NAAR では 9 つの惑星 (navagraha) が、Rāhu と Ketu を一緒にまとめて 8 という数を得て、この音素の 8 行と対応関係を持つものとされる (NAAR pp. 6-7)。これは graha を 8 つと数える Jayaratha の見解を訂正しつつ、引き継いでいる例である。NAVi p. 102 も参照のこと。
27. NA intro., p. 61 参照。
28. YH においても PS においても、Rudra およびそれに対応する māṭṛkā は 51 とされている。これに対して NA に対するこの二つの注釈は Rudra の数を 50 とする点においてそれらのテキストと食い違いを見せる。NARV および NAAR pp. 5-6 参照。
29. このような音素と Rudra の化身達の同一視は Kaula の伝統の中でよく見られるものであるという。Padoux [1990] pp. 156-157 参照。
30. これら Brāhmī などの 8 女神は、śrīcakra を描く際にその一番外側、四方の門の周囲に配置される。  
「Brahmāṇīを西門に、Maheśīを北[門]に、Kaumārīを東の方角の門に、同様に Vaiṣṇavīを南に。Varāhīもまた北西に、Indraṇīを北東に、Cāmūṇḍāもまた南東に、Mahālakṣmīを南西に [供養すべし] (NA 1. 156-157)」
31. この箇所を 8 つの pīṭhā として解釈することが NA 本来の意図であったとはいささか考えにくい。このような解釈は NAAR のこの箇所にのみ見られるものであって、NA 自身は他の箇所においても 4 つの pīṭhā にしか言及していないからである。  
「kāma (Kāmarūpa)、pūrṇa (Pūrṇagiri)、jakāra と呼ばれるもの (Jālandhara)、śrī (Oḍyāṇa) という pīṭhā の中に住む、4 つの智慧の入れ物である Śrītripurā を私は礼拝する」(NA 1. 12)。  
pīṭhā の数はテキストや文脈に応じてしばしば異なるが、そうした pīṭhā のヴァリエーションの中でこの 4 つの pīṭhā は常に重視され、また神学的にも大きな意味を持っている。
32. Jayaratha の注釈において YH の引用と思われる文章が見出される。Padoux [1994] intro., p. 41 参照。
33. 私の見る限りでは、このような形の ṣodhānyāsa は YH 以降のテキストにしか見出されない。これと同じ語が YH 以前のテキストにおいて見出される場

合もあるが、それもまた YH で述べられている ṣoḍhānyāsa とは異なったものである。これらの nyāsa が YH の ṣoḍhānyāsa の成立に対して影響を与えているということは十分に考えられることである。

この点に関しては TĀ 15. 247, *Kulārṇava* 4. 20 など参照。

### 参考文献

#### 一次文献

- JA: *Jñānārṇavatāntram*, ed. by G. S. Gokhale, Ānandāśrama Sanskrit Series 69, Poona, 1952.
- JDV: *Jñānadīpavimarśinī of Śrī Vidyānanda Nātha*, ed. by A. V. Dvivedi, Yogatantra-granthamālā 26, Varāṇasi, 1996.
- NA: *Nityāṣoḍaśīkārṇavaḥ with Two Commentaries R̥juvimarśinī by Śivānanda and Artharatnāvalī by Vidyānanda*, ed. by V. V. Dviveda, Yogatantra-granthamālā 1, Varāṇasi, 1968 ; *Nityāṣoḍaśīkārṇavaḥ with the Commentary Setubandha of Bhāskararāya*, Ānandāśrama Sanskrit Series 56, Poona, 1973 ; *The Vāmakeśvarīmatam with the Commentary of Rājanaka Jayaratha*, Kashmir Series of Texts and Studies 66, Srinagar, 1954.
- NAAR: *Nityāṣoḍaśīkārṇavārtharatnāvalī*. Cf. NA.
- NARV: *NityāṣoḍaśīkārṇavaR̥juvimarśinī*. Cf. NA.
- NASB: *Nityāṣoḍaśīkārṇavasetubandha*. Cf. NA.
- NAVi: *Nityāṣoḍaśīkārṇavavivarana*. Cf. NA.
- NU: *Nityotsava of Umānandanātha*, ed. by A. M. Sastri, Gaekwad's Oriental Series 23, Baroda Oriental Institute, 1948.
- PS: *Prapañcasāratāntra of Śaṅkarācārya*, intr. by A. Avalon and ed. by A. Sarasvatī, Motiral Banarsidass Publishers, 1989.
- TĀ: *The Tantrāloka of Abhinavagupta with Commentary by Rājānaka Jayaratha*, ed. by M. K. Śāstrī, vol. 9, Kashmir Series of Texts and Studies 59, Srinavar, 1938.
- TR: *Tantrarāja*, ed. by L. Sastri, intr. by A. Avalon, Motiral Banarsidass Publishers, 1981.

- YH: *Yoginīhṛdayam*, ed. by V. Dviveda, Motiral Banarsidass Publishers, 1988; *Yoginīhṛdayam with Commentaries Dīpikā of Amṛtānanda and Setubandha of Bhāskararāya*, ed. G.Kaviraj, Sarasvatībhavana-Granthāmāla 7, Varanasi, 1979.
- YHDī: *Yoginīhṛdayadīpikā*. Cf. YH.
- YHSB: *Yoginīhṛdayasetubandha*. Cf. YH.

二次文献

- Brooks, D. R. [1992] *Auspicious Wisdom*, State University of New York Press.
- Jani, A. N., [1994] "Method of Implementing Mātṛkānyāsa" in *Pandit N. R. Bhatt Felicitation Volume*, pp. 555–558, Motiral Banarsidass.
- Goudriaan, T., Gupta, S. [1981] *Hindu Tantric and Śākta Literature*, A History of Indian Literature, V. 2, Fasc. 2, ed. Gonda, J., Otto Harrossowits.
- Gupta, S., Hoens, D. J., Goudriaan, T. [1979] *Hindutantrism*, Handbuch der Orientalistik, Zweite Abteilung 4. Band 2. Abschnitt, Leiden.
- Padoux, A. [1980] "Contributions à l'étude du mantrasāstra 2. Nyāsa : l'imposition rituelle des mantra" in *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient* 67, Paris.
- Padoux, A. [1990] *Vāc. The Concept of Word in Selected Hindu Tantras*, tr. by Gontier, J., State University of New York Press.
- Padoux, A. [1994] *Le cœur de la yoginī*, Publications de l'Institut de Civilisation Indienne, Fasc. 63, Édition Diffusion de Boccard.
- Rastogi, N. [1979] *The Krama Tantricism of Kashmir*, vol. 1, Motiral Banarsidass.